



©Yuki Nakase

夜の銀行

アメリカ第一

1月にトランプ大統領が就任し、私の周りの人々は少しざわわしています。トランプ大統領の低い支持率や抗議デモなどについては日本でも大きく報道されていることでしょう。特にアメリカ有数の“人種のるつぼ”であるニューヨークではトランプ大統領の考え方に反対する人が多く、外国人の私にさえ「今週末の抗議デモ行く？」と普通に聞いてくる友人がいるほど、抗議のために集まることが日常と化しています。外国国籍の友人も多数デモに参加していましたが、アメリカで働かせていただいている外国人の私は、アメリカ政府に対するネガティブな意見を公の場で発表する権利を持ち合わせていないように感じます。しかし、「アメリカ第一」「アメリカ製品を買ってアメリカ人を雇え」という大統領就任演説での宣言は、具体的には誰に向けられた言葉だったのか、アメリカとは何なのか、考えざるを得ない空気を強く感じるのには確かです。

トランプ大統領の就任に伴い、先行きの不安のためか、もしくは抗議そのものがイベントと化しているのか、今年に入って照明業務が必要とされる催し物が大幅減っているのが事実です。買い控える個が集団を成しているの、催し物に出資している企業も出費をなるべく控えがちなのは当然のことかもしれません。先日、アソシエイト照明デザイナーとして携わった仕事では、昨年12月の中旬から照明図面を書き始めたにも関わらず、1月上旬に私を雇う余裕がないと一旦チームから離れることになりました。しかし、アソシエイトなしでは実現不可能な仕込みの規模であることを照明デザイナーが訴え続け、1月下旬に私の復帰が決まりましたが、大きな敷地内に派手な演出を持ち込む演出とは裏腹に、小さな経費の値引きが半端ない現場でした。たとえば、州をまたぐ現場までの交通費の支払いを拒否したり、ケータリングや食事代があやふやだっ

たり、細々とした雑費を「僕はもちたくない！」とあっちこっちに投げまわされている小さな火のついた爆弾のように感じました。元々、照明費をできるだけ安くしようとするのが制作の常ですが、それに輪をかけて値引きを強制する様子は、これまでにない光景です。

この私の状況や諸経費の削減は私の国籍と全く関係のない出来事でしょう。しかし、予算削減の際に一番に切られるのはヒエラルキーの底辺で働く人たちであり、「アメリカ人」がやりたくない仕事を安い給料で引き受ける有色人種の仕事が無くなったら、困るのは「アメリカ人」です。たとえば、先述の抗議デモで主張される訴えの中に人種差別がありますが、デモに参加している「アメリカ人」が公共の場に残した莫大なゴミ処理の仕事を引き受ける大多数は有色人種でしょう。人間の平等を訴える人たちでさえ、人種の階層の上に乗っかって生きていることを意識できないほど人種差別は根が深く、一旦一つの階層に振り分けられたら、そこから抜け出すのは非常に難しいと思われれます。

舞台芸術を生業としているデザイナー間でよく言われるのは、「ボランティアをするな」です。ここでいう「ボランティア」とは、無料で照明デザインを提供することを意味します。ニューヨークに来て間もないころにそのアドバイスをいただいて、当時は非常に驚きましたが、今となってはもっともな意見だと思います。無料やお小遣い程度の給料で照明デザインを提供し続けると、そのカテゴリーから抜けるのが次のステップとなります。アメリカでは、安い給料で労働を買うことが日本でいうところの義理や人情に直結しないということなのでしょう。「アメリカ第一」の社会でどのように生きるか、対応が迫られています。